

私と少数民族と少数言語

あなたはどんな存在か？

何年か前にそう問われたら、多分どうやって答えたらよいか分からなかっただろう。うれしいことに今は、以前よりもいい答え方が浮かぶようになった。

家族について

私の家族は、北海道と秋田にルーツを持っている。私の曾祖父母たちは、他の多くの日本人と同じく、豊かになっていつか日本に帰るという約束を信じ、家族でブラジルへと渡った。けれどもブラジルに着いた時、彼らはだまされていたことに気が付いた。それから戦争が始まり、彼らの生活は一変した。時間が流れるにつれ、彼らはもう日本に戻ろうと思わなくなっていた。

戦時中やその後の長い独裁時代に経験した差別のため、現地の日本人の多くは、自身の言語を子供たちに伝えることをやめた。結果として、私の世代の日系人は多くが日本語を全く話すことができない。

私の子供時代

子供のころからいつも、祖父母が日本から来ていることを知っていたし、地球儀で日本とブラジルを見つけることもできた。しかしその頃は、それがどういうことか分かっていなかった。

両親が働いている間、祖父母は私と兄の面倒を見てくれた。その時に「靴が鳴る」や「故郷」といった日本の童話を、歌詞の意味もよく分からないまま歌っていた。一番好きだった童話は「はなさかじいさん」だったが、当時は童話の中の文化的側面を全く理解できなかった。

反応

4歳の頃幼稚園に入り、自分が他人と違うことにはじめて気が付いた。私は自分がブラジルの生まれであると言ったけれど、他の子供に言わせれば、私は日本人なのだという。私の最初の反応は、自分が他人と違うということに由来する自分自身への嫌悪だった。私は自分のルーツやあらゆる日本的なものを拒むようになった。私は祖父母に教えてもらった歌を歌うこともやめた。小学校に入った時、ほとんどの野菜の名をポルトガル語で言えないことに気が付いた。それで、覚えている日本語をほとんどすべて頭の中から取り除こうと決めた。

その間、私はよりブラジルの的にならなければいけないと感じ始めた。地域社会の多数派文化へ順応しようとする努力はしばしば、私の家族から受けた教育に逆らうことも意味した。そしてもちろん、私は自分をそれほどまでに深く変えることに失敗した。日本食レストランで箸を使えないふりをするような、バカなことをしたことを覚えている。

転機

8歳のある日、北海道の親戚が私の家族のところへやってきた。その親戚のおかげで、初めて日本に興味を持つようになった。彼らが帰った後、手紙や年賀状、それに時々プレゼントも交換するようになり、その関係は18年続いた。その間、私は少しずつ自分のルーツを受け入れ始めていた。多分自分のルーツを嫌うことが、自分の家族を嫌うことと同じだと感じていたのだろう。それでも、それはゆっくりとしたプロセスで、長い時間がかかった。

11歳の時、日本のポップミュージックを聞き始めた。新しい日本文化への関心は、自分のルーツを受け入れるプロセスを助けた。もちろん、それにはアニメに対する一生ものの関心も含まれている。しかし日本の音楽は「アジア的」すぎると感じていたため、いつもこの関心を友達には隠していた。そのころの私は自分の中のアジア的なものを許容できていたものの、それはどこか自分の人生の隠された部分になっていた。兄と違って、私は日本人の友達をほとんど作らなかった。自分と似た人と友達になるうとは決して思わなかった。兄は今でも日本人としか付き合いを持たない。

少数民族との出会い

新しい日本文化に関心を持ち始めていた11歳の頃、ネットを通じてカタルーニャ人、ガリシア人、バスク人の友達と付き合いを始めた。私にとって、スペインが多言語国家だということを知ったのは大きな発見であった。こうした友達を通し、私は少数民族と少数言語に関心を持ち始めた。中には、自身の言語やアイデンティティを拒絶する友達もいた。当時の私は、なぜ彼らがそんなことをするのか全く理解できなかったが、それを理解する鍵は実は私自身の中に存在していた。

2回目の転機

15歳の頃、私は日本語を学び始めた。親戚に日本語で初めて手紙を書いた時のことをまだ覚えている。多分その頃には、もう自分のアイデンティティを隠そうとはしなくなっていた。残念なことに、標準日本語と日本の大衆文化への興味が増すにつれ、祖父母の使う東北方言への恥ずかしさが増えていった。当時私は日本の方言を全く知らなかったため、祖父母は教育を受ける機会が少なかったため変な日本語を話しているのだと思っていた。そのかわり、自分をアイデンティティのない人間だと感じることもよくあった。というのも、私には完全にブラジルに属しているという意識もなければ、一方で同時に、日本人であるという意識もなかったからである。

その後の少数民族との関わり

16歳の頃、当時カタルーニャ人の友達が何人かいて、その言語を気に入っていた私は、カタルーニャ語を学ぶことに決めた。カタルーニャ語は、そのころの私の一番好きな言語だった。その言語や文化を好きになり始めるのと同時に、自分がどこかカタルーニャ的になったとさえ思っていた。それは、自分のアイデンティティを感じられないという不足感を満たすもののように感じられた。カタルーニャ語とカタルーニャに対して熱狂的すぎた時期だった。私は自分のカタルーニャ語からあらゆるスペイン語の影響を取り除き、純化することに努めた。私は当時、一度もカタルーニャに足を運んだことはなかったけれども、カタルーニャ独立論者になっていた。自身の文化に誇りを持つ多くのカタルーニャ人と知り合いになったが、そういうことに全く熱心でないカタルーニャ人もたくさん知り合いになった。

なぜ少数言語とその文化を守る必要があるのか？

いくつかの科学的な論文によると、カナダの少数民族コミュニティにおいて、自殺者数と母語の知識の欠如には明確な関係が認められたという。また、彼らの母語の復権は身体的・精神的健康や認知能力の向上、教育における成功につながることを示す研究もある。それにより、話者の中の人を敬う気持ちや連帯感、自分の文化的ルーツに対する自尊心とアイデンティティは増幅する。

日本でも主に、沖縄とここ北海道に少数民族が暮らしている。今日の最初のメッセージは「地域の少数民族を守ろう」である。

ラベル

我々人間は、ラベルを張って物事を分類するのが大好きで、全てのものに名付けの必要性を見出す。何らかのラベルに当てはまらないものがあれば、それを分類するため、単に新しいラベルを作る。

ラベルは世界で自分を見つけることの助けになる。これは私の経験でもある。ときどき、自分が他人と違うと感じる時、私の中の何かを説明してくれるラベルを見つけることで、心地よさを感じていた。

一方で、ラベルはよくステレオタイプを含み、なんらかの意味であるものを自分に押し付けてしまうこともある。例えば、私は「ブラジル人」というラベルを自らに付け、そうなるかと努めた。しかし結局、私は自分が完全にブラジル人だとも完全に日本人だとも感じることはなかった。この意味で、ラベルとは自分自身を限定するものだ。世界中の何物も、白か黒かのどちらかだということはない。それらは連続体（スペクトル）という物差しの上のどこかに自らを見出す。

では、いったい私はどんな存在なのだろう？

だから、もし「あなたはどんな存在か？」と私が尋ねられたなら、その答えは「私は優次。28歳のブラジル系日本人、無神論者でプログラマー、カレーマニアで言語マニア、エスペランティスト、同性愛者、内向的で気が小さくて、忘れっぽく、遅れがちで方向音痴、ためらいがち、等々…」である。しかし、並べられた言葉のどれもが私を定義するものではない。だから、私の最後のメッセージは「あなたが誰であらねばならないか、他人に決めさせてはいけない」である。

「私にラベルが張られる時、私は否定される」（セーレン・キルケゴール）